

パン屋再襲撃

村上春樹



文春文庫



文春文庫

パン屋再襲撃

定価はカバーに
表示してあります

1989年4月10日 第1刷

1990年2月10日 第4刷

著者 村上春樹

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-750201-1

文春文庫

パン屋再襲撃

村上春樹



文藝春秋

作品集 パン屋再襲撃 目次

パン屋再襲撃

9

象の消滅

37

ファミリー・アフエア

71

双子と沈んだ大陸

123

ローマ帝国の崩壊・一八八一年のインディアン蜂起・
ヒットラーのポーランド侵入・そして強風世界

ねじまき鳥と火曜日の女たち

169

作品集

パン屋再襲撃

パン屋再襲撃

パン屋襲撃の話を書き聞かせたことが正しい選択であったのかどうか、僕にはいまもって確信が持てない。たぶんそれは正しいとか正しくないとかいう基準では推しはかることのできない問題だったのだろう。つまり世の中には正しい結果をもたらす正しくない選択もあるし、正しくない結果をもたらす正しい選択もあるということだ。このような不条理性——と言って構わないと思う——を回避するには、我々は実際には何ひとつとして選択してはいないのだという立場をとる必要があるし、大体において僕はそんな風に考えて暮している。起ったことはもう起ったことだし、起っていないことはまだ起っていないことなのだ。

そのような立場から物事を考えると、僕は何はともあれとにかく妻にパン屋襲撃のことを話してしまった——ということになる。話してしまったことは話してしまったことだし、そこから生じた事件は既に生じてしまった事件なのだ。そしてもしその事件が人々の目にもし奇妙に

映るとすれば、その原因は事件を包含する総合的な状況存在の中に求められて然るべきであろうと僕は考える。しかし僕がどんな風に考えたところで、それで何かが変るといふものではない。そういうのはただの考え方に過ぎないのだ。

僕が妻の前でパン屋襲撃の話を持ちだしたのは、ほんのちょっとしたなりゆきからだった。その話を持ちだそうと前もって決めていたわけでもないし、そのときにふと思いついて「そういえば——」という風に話しはじめたわけでもない。僕自身その「パン屋襲撃」という言葉を妻の前で口に出すまで、自分がかつてパン屋を襲撃したことなんてすっかり忘れてしまっていたのだ。

そのとき僕にパン屋襲撃のことを思い出させたのは堪えがたいほどの空腹感であった。時刻は夜中の二時前だった。僕と妻は六時に軽い夕食をとり、九時半にはベッドにもぐりこんで目を閉じたのだが、その時刻にどういふわけか二人とも同時に目を覚ましてしまったのだ。目を覚ましてしばらくすると、『オズの魔法使い』にでてくる竜巻のように空腹感が襲いかかってきた。それは理不尽と言っているほどの圧倒的な空腹感だった。

しかし冷蔵庫の中には食物という名を冠することのできそうな食物は何ひとつとしてなかった。そこにあるものはフレンチ・ドレッシングと六本の缶ビールとひからびた二個の玉葱たまねぎとバターと脱臭剤だけだった。我々はその二週間ほど前に結婚したばかりで、食生活に関する共同

認識というものをまだ明確に確立してはいなかった。我々がその当時確立しなくてはならないものは他に山ほどあったのだ。

その頃僕は法律事務所に勤めており、妻はデザイン・スクールで事務の仕事をしていた。僕は二十八か九のどちらかで（どういうわけか結婚した年をどうしても思いだすことができないのだ）、彼女は僕より二年八カ月年下だった。我々の生活はひどく忙しく、立体的な洞窟のようにごたごたと混みいつており、とても予備の食料のことまでは気がまわらなかった。

我々はベッドを出て台所に移り、何をするともなくテーブルをはさんで向いあっていた。もう一度眠りにつくには二人とも腹が減りすぎていたし——体を横にするだけで苦痛なのだ——かといって起きて何かをするにも腹が減りすぎていた。このような強烈な空腹感がどこからどのようにしてやってきたのか、我々には見当もつかなかった。

僕と妻は一縷の望みを抱いて交代で冷蔵庫の扉を何度か開いてみたが、何度開けてみてもその内容は変化しなかった。ビールと玉葱とバターとドレッシングと脱臭剤だ。玉葱のバター炒めを作るという手もあったが、二個のひからびた玉葱が我々の空腹を有効に埋めてくれるとも思えなかった。玉葱というのは何かと一緒に口にすべきものであって、それだけで飢えを充たすという種類の食物ではないのだ。

「フレンチ・ドレッシングの脱臭剤炒めは？」と僕は冗談で提案してみたが予想したとおり黙

殺された。

「車で外に出て、オールナイトのレストランを探そう」と僕は言った。「国道に出ればきっとそういうのが何かあるよ」

しかし妻はその僕の提案を拒否した。外に出て食事をするのなんて嫌だと彼女は言った。

「夜の十二時を過ぎてから食事をするためには外出するなんてどこか間違ってるわ」と彼女は言った。彼女はそういう面ではひどく古風なのだ。

「まあ、そうだな」と僕はひと呼吸置いて言った。

結婚した当初にはありがちなことなのかもしれないが、妻のそのような意見（乃至はテーズ）はある種の啓示のように僕の耳に響いた。彼女にそう言われると、僕には、自分の今抱えている飢餓が国道沿いの終夜レストランで便宜的に充たされるべきではない特殊な飢餓であるように感じられたのだ。

特殊な飢餓とは何か？

僕はそれをひとつの映像としてここに提示することができる。

①僕は小さなボートに乗って静かな洋上に浮かんでいる。②下を見下ろすと、水の中に海底火山の頂上が見える。③海面とその頂上のあいだにはそれほど距離はないように見えるが、しかし正確なところはわからない。④何故なら水が透明すぎて距離感がつかめないからだ。

終夜レストランになんて行きたくないと言ったから、僕が「まあ、そうだな」と同意するまでの二秒か三秒のあいだに僕の頭に浮かんだイメージはだいたいそのようなものだった。僕はもちろんジグムント・フロイドではないので、そのイメージがいったい何を意味しているかを明確に分析することはできなかったが、それが啓示的な種類のイメージであることだけは直観的に理解できた。だからこそ僕は——空腹が異様なほど強烈なものであったにもかかわらず——食事のために外出はしないという彼女のテーゼ（乃至は声明）に半ば自動的に同意したので。

仕方なく我々は缶ビールを開けて飲んだ。玉葱を食べるよりはビールを飲む方がずっとまじだったからだ。妻はビールをそれほどは好まなかったもので、僕は六本のうちの四本を飲み、彼女が残りの二本を飲むことになった。僕がビールを飲んでいて、彼女は十一月のリスのようにこまめに台所の棚を探しまわり、袋の底にバター・クッキーが四枚残っていたのを見つけた。それは冷凍ケーキの台を作ったときの残りで、湿ってすっかり柔かくなっていたが、我々はそれを大事に二枚ずつかじった。

しかし残念ながら缶ビールもバター・クッキーも、空から見たシナイ半島のごとき**茫漠**とした我々の空腹には何の痕跡も遺さなかった。それらはみすばらしい風景の一部のように窓の外を素速く通りすぎていっただけだった。